

東上総の塚について

鳴田 浩 司

1. はじめに

ここ数年、一連の道路関連の調査において、いくつかの塚の調査を実施した。今回取り上げる遺跡の調査は筆者が担当したものではなく、その概要については図面・写真・文書記録やそれぞれの担当者から伺ったものを筆者が文章にしたものである。したがって担当者が調査中に知り得た様々な情報をここで網羅できてはいないことをお断りしておくと同時に、今後の本格的整理の一助になれば幸いと思う。

それでは調査の概要を紹介するとともに、調査から得られた成果より問題点をいくつか取り上げ、私見を述べたい。

2. 栗焼棒遺跡

栗焼棒遺跡は山武郡山武町矢部字日向497-1他に所在する。当遺跡についてはすでに半澤幹雄氏により、「千葉県文化財センター年報—平成5年度—」や「研究連絡誌第42号」で掘立柱建物跡等について詳しく紹介されている。遺跡の位置と調査概要はそちらを参考にしていただき、ここでは調査区の西側の道路際にあった近世塚1基（1号塚）について若干の紹介をしたい。

1号塚は、直径約6m、高さ1.4m～2.3mの緩斜面に造られた円形の塚である。塚は北に開析する小支谷の谷頭に位置し、道路がちょうど柵形に屈曲するところに築かれている。塚の西側には発掘調査により南北に近世のものと考えられる溝状の遺構が2条検出された。塚の中心に近い盛土中から2～3面にわたって、数点ずつまとまって銭貨が出土した。銭貨に伴う土坑等の遺構は確認されず、盛土を築く際に数回にわたって置かれたと考えられる。盛土は緩斜面を意識して、水平に盛られていた。出土銭貨は寛永通宝47枚と、至元大宝1枚である。寛永通宝はすべて銅銭で、背面は無文である。それぞれの細かな分析は本報告に譲

るが、「寛」及び「寶」の文字の特徴から、すべて古寛永（初鑄年1636）と考えられる。

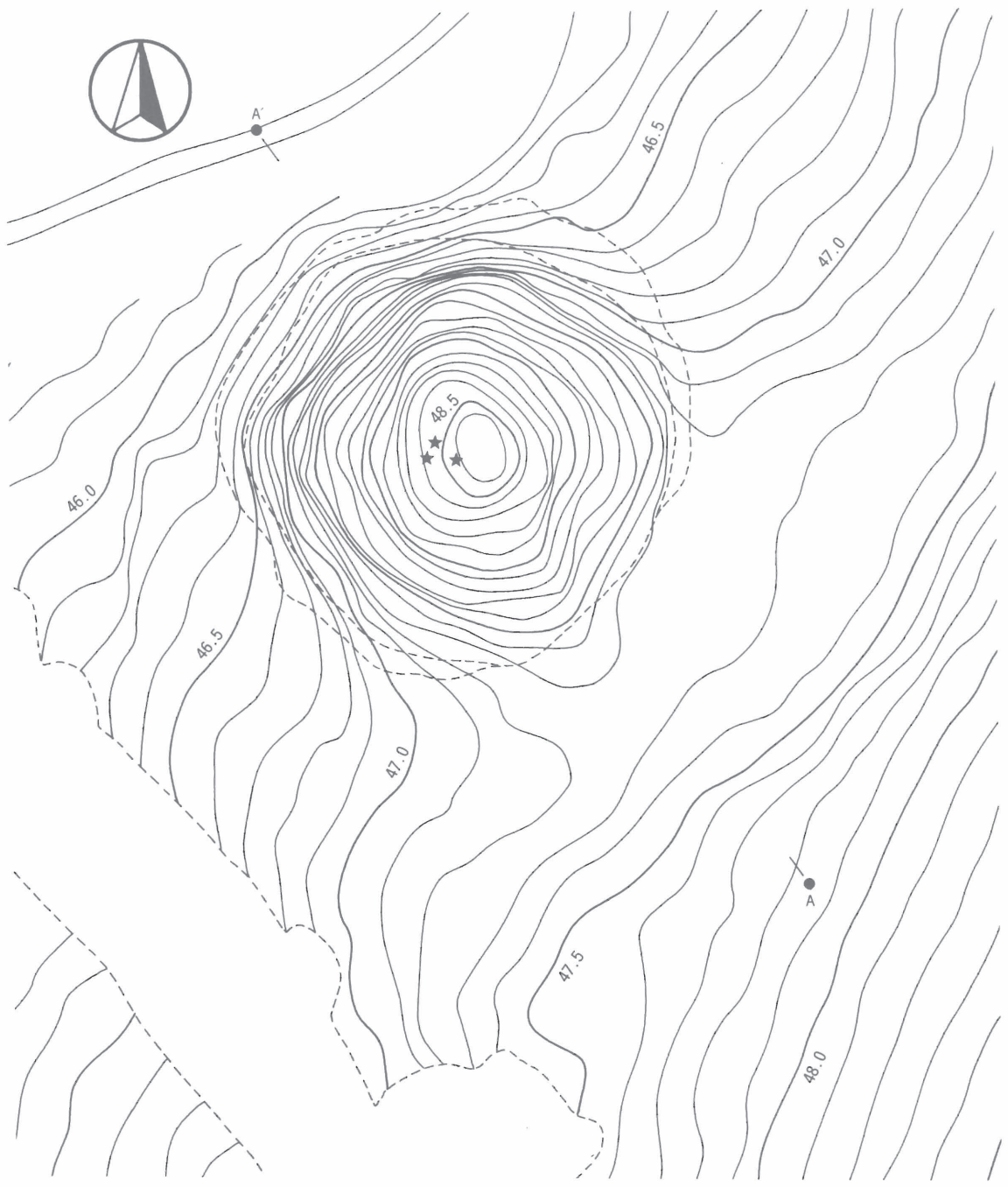
3. 市谷遺跡

市谷遺跡は東金市滝沢字市谷481他に所在する。九十九里浜に流入する真亀川最上流の小河川によって開析された標高58mの台地上に位置する。遺跡の立地する台地と谷部をはさんで滝沢集落がある。「滝沢」は応永から永享年間（1394～1440）に成立の「鶴岡八幡宮寺供僧次第」の補遺に「上総国北山野辺郡内滝沢郷」と見える郷名である。滝沢村は極楽寺村、植草村、酒蔵村、滝村を結ぶ道路が交わる交通の要衝の地であり、その名の示すように水量豊かな沢が民家の前の街道筋に沿って流れ、最近までこの水で畑の作物を洗ったり、洗濯していたりしたようである。調査前の現地は樹齢40年前後の銘木山武杉が整然と植林されていた。調査で検出された遺構は旧石器時代ブロック3か所、縄文時代土坑8基、同陥穴6基で、遺物では縄文土器（早期、前期、後期、晩期）が出土している。

確認調査で検出された上記の遺構以外に塚3基を調査した。ここでは仮に北から順に1、2、3号塚と呼ぶ。塚は3基とも改変が著しく、1、2号塚は周辺との比高差0.5m～0.7mとかなり低く、墳丘があるとわかるもので、調査の結果直径約9mの円形の塚と判明した。3号塚は長さ6.5m、高さ1.8mで、道路による掘削のため、西側がかなり削平されていて、土手状に残っていた。もとの地主さんのお話によると、杉の植林の際にかなりの数の塚を削平したということで、道路に沿って相当数の塚があったことがわかった。そのうち、現在畑として使われている遺跡北端には最も大きな方形の塚があったということであるが、これも同時期に削平され、現在ではその痕跡すらわからない。

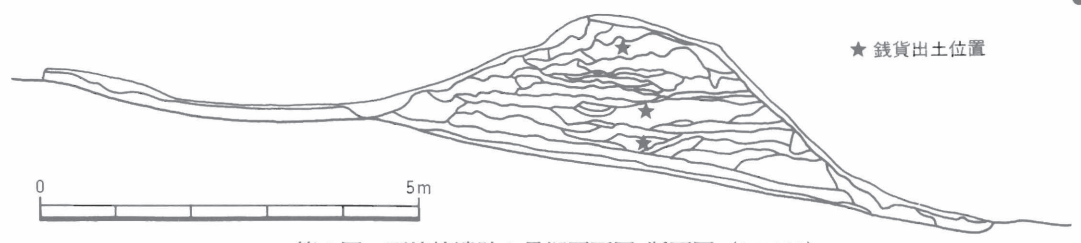


第1図 栗焼棒遺跡1号塚位置図 (1:5,000)



A 49.0m

A'



★ 銭貨出土位置

第2図 栗焼棒遺跡1号塚平面図、断面図 (1:100)

「千葉県埋蔵文化財分布地図」によればすぐ南には円墳4基、方墳2基からなる滝沢古墳群が所在するというのであるが、現地を確認したところこれらは塚で、調査した塚を含め、一連の塚群を形成しているとみられる。この古墳群の周りには現在では墓地が形成されている。明治17年測量の陸軍迅速図中では、市谷遺跡側は当時松林で、道路を境とした滝沢古墳群側は杉林であった。また、3号塚から北側に向かって小道があったことや、すでに墓地も存在していたことがわかる。

4. 千神塚群

千神塚群は松尾町谷津字四ツ塚141-1他に所在する。塚群は標高43mの台地の奥部の平坦地に位置し、塚に沿う道路は西側に延びて、台地の先端から集落の斜面に広がる中近世の墓域の中を抜け谷津集落へと続く。反対に東側では遠山村の集落へと続いている。また、塚群の中央部から北側に道路が分岐していて、この道路は谷をぬけて谷津集落へと続き、またその途中で山室集落へと更に分岐している。調査は継続中であるが、塚以外の近世遺構は検出されていない。

塚は合計30基で、道路に沿って北側に29基が連続して並び、1基のみ南側に位置している。この道路の拡張や杉の植林によって塚も少なからず削平を受けている。そのうち東から14基は一直線上にきれいに並ぶが、15基目以降は並び方がやや不規則になる。塚の規模は最大で直径7.8m、最小で直径3m、平均して5.3mの非常に小型の円形塚である。両端の塚間の距離は163mを測る。明治17年測量の陸軍迅速図では周辺は松林であったことがわかる。

5. まとめと問題点

①栗焼棒遺跡1号塚について

まず、栗焼棒遺跡1号塚に見る寛永通宝を埋納する塚の事例をいくつかあげてみよう。ただし、表土中からの出土例や表採された例は割愛させていただきます。

a) 東金市家之子女古墳群

東金市家之子女古墳群に所在する。栗焼棒遺跡から直線距離で南南西2kmに位置する。「千葉県埋蔵文化財分布地図」によれば家之子女古墳群は前方後円墳5基、円墳64基、方墳5基からなる東金市

最大の古墳群である。昭和42年に緊急調査が行われ、古墳群中に塚が混在しているのがわかった。

第71遺構は一辺8m四方の方形の塚で、高さは2.5m程を測る。墳頂から深さ250cmと246cmのところで黒色土の中から寛永通宝が6枚ずつ重なって、70cm離れて2か所で出土した。盛土はほとんど黒色土で古墳の築造のような互層はみられず、古銭出土の下40cmと46cmで地山のローム層に達した。寛永通宝は6枚ずつさしの状態であったようである。

第77号墳は一辺9m、高さ2.5m程の方形の塚である。別名カネ塚と呼ばれる。墳丘は粘土を主とし、その粘土は褐色土層・茶褐色土層・黄褐色土層の互層となっており、不規則にほぼ水平に積み上げており、特に中央を先にしたなどということはなかった。墳頂から深さ167cm(即ち地表上80cm)に赤漆塗り箱に納められた松喰鶴文鏡1点(直径10.5cm、縁高1.1cm)と寛永通宝53枚、同背文字銭65枚、治平元宝1枚、元宝通宝1枚、不明銭1枚など計121枚の古銭が出土した。その他78号遺構(6mの方形)、79号遺構(東西約15m、高さ3.5m、頂上が2m四方で平坦)等が所在している。

b) 村上供養塚

八千代市村上に所在する。京成電鉄勝田台駅より北方1.3kmの新川に注ぐ小河川に開析された支谷の最奥部の台地上に位置する。周囲に7基の塚があり、併せて村上第2塚群と呼んでいる。

村上供養塚は塚群中最も南側に位置し、最も規模の大きな塚である。南側はすでに削平されていたが、北側はかろうじて残っており、測量の結果一辺16m、高さ3.2mの方形の塚であることがわかった。調査では注目される結果が得られている。すなわち「主体部はつぼ2個と内部に銅銭が、そしてつぼに付着するように小皿が5枚と及び銅銭塊が出土した。つぼの周囲に白い木粉が土層に拡散していたがこれはつぼのふた板と思われる。それがためつぼの上部、特に口唇部におびただしく付着していた。またつぼの下部から底部にかけては木粉が認められなかった。AT(Aトレンチ)からは銅銭が二カ所から、小皿が五カ所から出土した。BT(Bトレンチ)からは銅銭が二カ所から出土した。」ということである。この壺2点は実測図や胎土中に長石・石英粒を含むということから常滑産の甕と考えられる。口縁や肩部の形態か

ら16世紀後半から17世紀代のものであろう。銭貨は合計293枚出土しているが、甕の中からはそれぞれ91枚と150枚が出土していて、内訳は前者が寛永通宝86枚、景祐元宝1枚、至和元宝1枚、元祐元宝2枚、永楽通宝1枚で、後者が寛永通宝147枚、聖宋元宝1枚、洪武通宝2枚である。甕の中以外から出土した銭貨はすべて寛永通宝である。また、寛永通宝はすべて古寛永で、洪武通宝2枚は背面に「治」の文字を鋳出す加治木銭（島津氏が寛永12～13年頃まで鹿児島県加治木市で鋳造した）である。

c) 村上第2塚群001遺構(塚)

村上供養塚と同じ塚群に属し、村上供養塚の北西115mに位置する。方形で東側を削平されていて調査時点では東西5.6m、南北6.9m、高さ1.55mを測る。この調査では多数の銭貨をはじめ遺物が出土している。すなわち「マウンドの中央部（A地点）と、そこから約50cm南に離れた地点（B地点）の2地点に、埋納されたと考えられる遺物が出土した。A地点の遺物は、小皿10枚・珠子玉6個・古銭222枚（寛永通宝220枚・洪武通宝1枚・宣和通宝1枚）である。これらの遺物は、最初の盛土の中央部の浅い凹みの中から一括して出土した。浅い凹みは、径25cm程度の円形を呈し、底面は丸底で、旧表土面まで掘り窪められており、内側の土は締まっていた。遺物と共に充満していた土は、サラサラして軟らかい。遺物のうち、古銭は、その大半は紐を通してきつく括られた状態で各々重なりあっていたが、小皿は下向き・上向き・横向き等一定の方向になく、また、珠子玉も各々別々に存在していた。また、充満していた埋土の状態からすれば、当初この埋置された凹みの上部は、蓋状のものが置かれていたと考えられる。B地点出土の遺物は古銭6枚（寛永通宝）である。」A地点出土の寛永通宝は裏面に「文」の文字が鋳造されているいわゆる文銭が88枚、残り132枚が古寛永である。B地点出土の寛永通宝はすべて裏面に「文」の文字が鋳造されているいわゆる文銭である。

d) 八木ヶ谷遺跡遠山塚群3号塚

船橋市神保町133-1他に所在する。一辺10m×8.8m、高さが2.4mの方形の塚で、塚には肥前産の染付瓶1点、銭貨276点、数珠玉、頭髮、和紙、紐などが埋納されていた。銭貨は寛永通宝が268枚、

開元通宝1枚、至道元宝2枚、祥符元宝1枚、景祐元宝1枚、皇宋通宝1枚、熙寧元宝1枚、永楽通宝1枚で、寛永通宝はすべて古寛永である。染付瓶の生産時期は17世紀中葉で、神保新田開発初期の17世紀中葉に、生前供養（逆修）塚としてつくられたものと考えられている。

県内では寛永通宝を埋納する塚は20例近い調査事例があるが、特に資料の充実している以上4つの遺跡を取り上げてみた。まず出土銭貨の鋳造年代に基づく遺構の年代についてであるが、鈴木公雄氏によれば出土六道銭の研究から渡来銭から古寛永への転換は急激に行われたが、古寛永から文銭（裏面に「文」字が鋳出されているもの、初鋳年1668）、文銭から新寛永（1697年初鋳のものを示し、「文」字を持たない）には徐々に転換したとされている。その研究成果に基づけば、栗焼棒遺跡1号塚は古寛永のみで文銭、新寛永を含まず、よってその築造時期を17世紀中葉頃とすることができよう。八木ヶ谷遺跡遠山塚群3号塚、村上供養塚出土の寛永通宝も古寛永のみで同じく17世紀中葉となろう。これは供伴する常滑産甕、肥前産瓶の年代観とも矛盾しない。村上第2塚群001遺構（塚）ではA地点・B地点併せた計226枚中古寛永が132枚、文銭が94枚で、古寛永と文銭の比率が約3：2である。この塚では新寛永の出土がなく、まだ古寛永の比率が高いことから文銭鋳造開始からそれほど経過していない時期であることが想定される。したがって、当該塚の築造時期は17世紀後葉と考えられる。カネ塚は逆に若干ではあるが文銭の比率が高いので、その築造時期は村上第2塚群001遺構（塚）よりもやや新しい17世紀末としておきたい。

余談になるが、寛永通宝は古くより多くの好事家の間で銭種の細分や、それぞれある程度の製造年代も把握されているので、他の寛永通宝を埋納する塚についても同様の分析を行えば、塚研究が更に進展していくと確信する。それには少なくとも全ての銭貨の原寸大の表裏拓本の掲載や詳細な出土状況観察の必要性を痛感している。

2番目の問題として、寛永通宝（近世通貨）に混ざって少数ではあるが、必ずといってよいほど中世の渡来銭が出土していることがあげられる。例えばその比率は栗焼棒遺跡では寛永通宝に対して47：1、家之子カネ塚では118：2（または3）、

村上供養塚では86：5と147：3で、村上第2塚群001遺構（塚）では220：2、八木ヶ谷遺跡遠山塚群3号塚では268：8となる。単純に計算すると17：1から110：1の比率の中に入る。平均では42：1の比率となる計算である。確率的に考えれば渡来銭がまだ市場に流通している時期であるので、上記の比率は納得できる数値であろうが、必ずといってよいほど渡来銭が混在するのは、はたして偶然の結果であろうか。

通貨流通史から見れば、この圧倒的な寛永通宝の優位性は慶長13年（1608）の金と銭貨のレートの規定、選銭や銭の売買についての規定をはじめとし、寛永13年に寛永通宝の鑄造という本格的な通貨政策が開始されるまでの、幕府の一連の強力な政策の反映と見て取れよう。文銭の鑄造される17世紀後半ころは、田畑の開墾が盛んに行われ、人口が急速に増加した時代であった。当時幕府は農村部への貨幣交換の浸透を積極的に図っていた。幕府は寛文10年（1670）には渡来銭の新銭（寛永通宝）との混用を禁止し、市場から閉め出す政策を実施している。その一つの混用例が、墓から出土する六道銭のみならず、今回のような塚出土銭貨からも伺われる。しかし、ここからは渡来銭の存在の意味についての積極的な答えは見いだせない。

渡来銭の中で異彩を放つのが永楽通宝である。その永楽通宝の近世に至っての優位性の変化は劇的である。中世末期には関東地方特に千葉県などでは六道銭にみる永楽通宝の出現率が他の渡来銭に比べ圧倒的に高く、永楽通宝に特別な価値があったことが考えられている。しかし、寛永通宝と併伴する渡来銭を見ると永楽通宝が圧倒しているとは読みとることはできない。すなわち永楽通宝のみならず各種の渡来銭が無作為に出土しているのである。この現象の最も大きな要因は上記の幕府の貨幣政策の結果であることはいうまでもない。一方は六道銭、他方は塚埋納銭という違いがあり、17世紀前半期の墓地及び塚の調査事例がほとんどない現況にあっては推測の域を脱し得ないが、このことは、遅くとも寛永通宝が市場に流通する時期までには、埋納銭としての永楽通宝の優位性が完全に失われていたと考えられる。その永楽通宝の優位性が失われていくとともに、17世紀中葉から後葉にかけて市場から閉め出されようとしてい

た渡来銭が貨幣として以外に、稀少であるがため特別な意味合いを持つようになり、そのため、故意に混ぜ入れたものとも考えられるのではないだろうか。以上は余り根拠のない憶測となってしまったが、今後は、17世紀の渡来銭の存在を貨幣の市場流通以外の面からも見ていく必要がある。

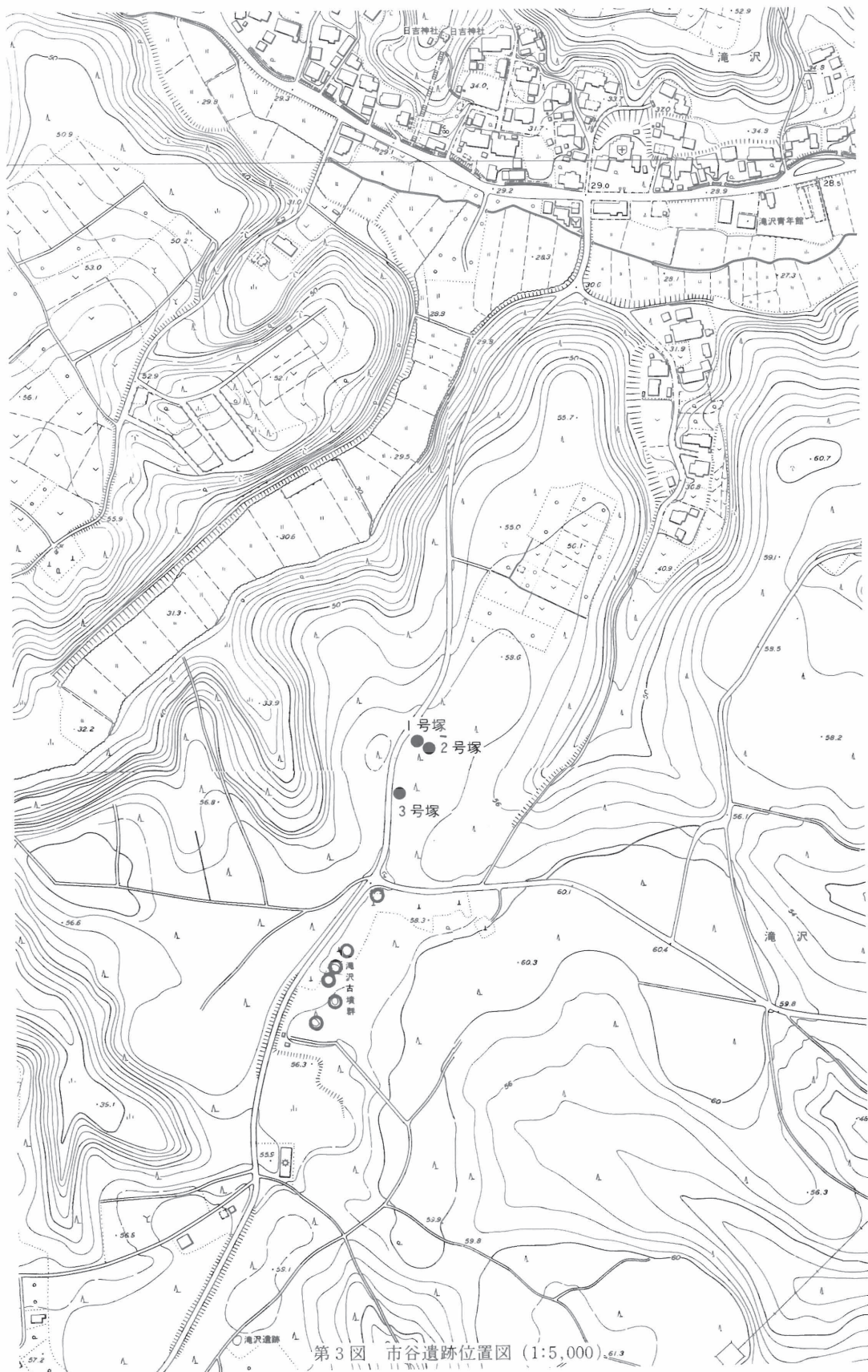
最後に、栗焼棒遺跡1号塚は寛永通宝以外の遺物は出土していないものの、他の調査事例からいわゆる「供養塚」と考えてよいであろう。栗焼棒遺跡1号塚のように17世紀代の寛永通宝を埋納する塚は、石造物を伴わないことが多く、ただ伝承としてその土地で「供養塚」と呼ばれることがある。しかし、この名称は、とかく伝承として軽視されがちな塚の名称の中にあって大いに注目すべきことである。つまりこの名称が残ったのは、近世の築造で新しいということと、村落全体という大集団による「供養」が行われたということで、今日まで比較的確実な伝承として伝わったのではないだろうか。

②市谷遺跡塚群と千神塚群について

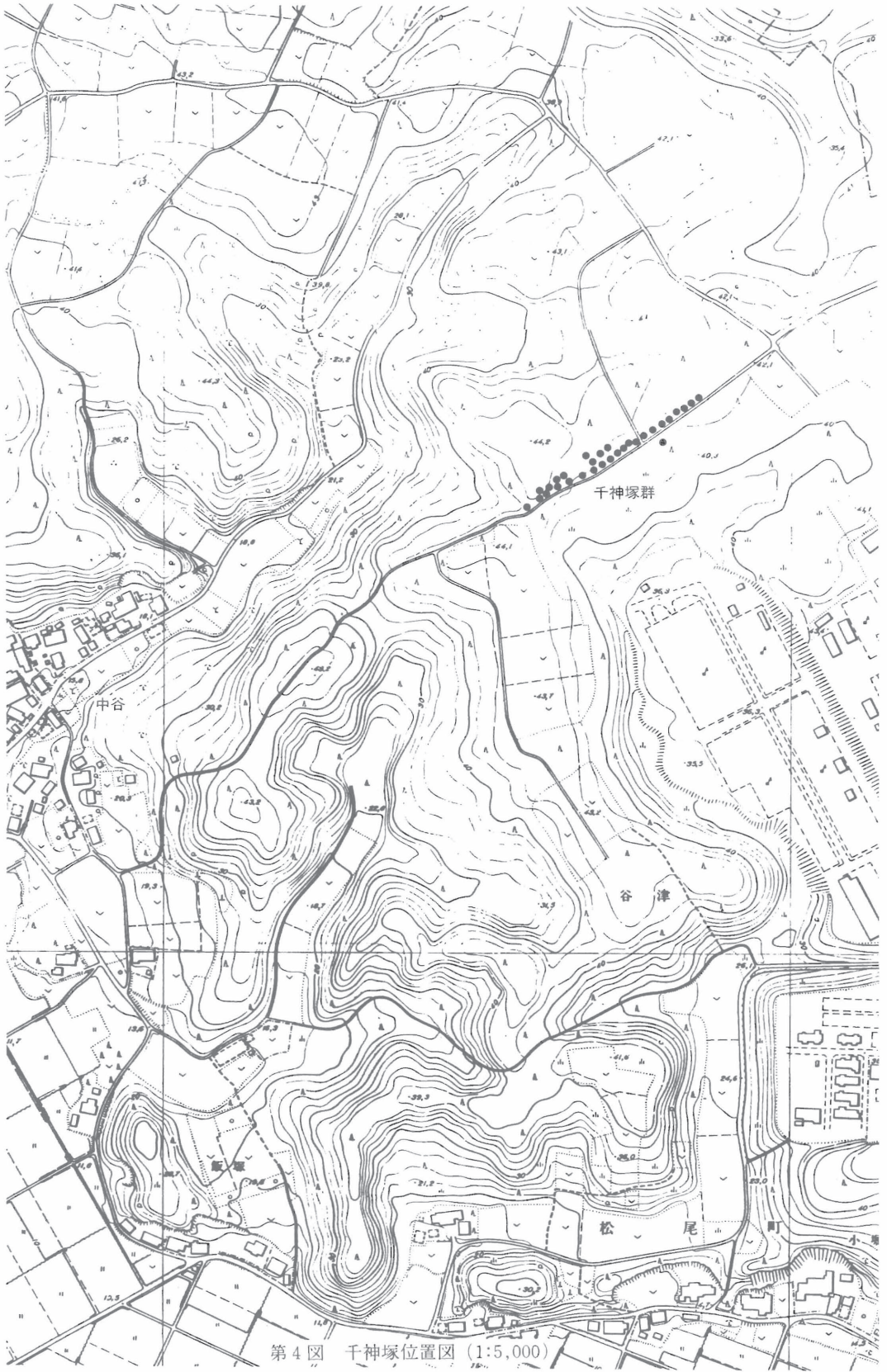
つぎに、塚が密集する市谷遺跡塚群と千神塚群について見てみよう。両塚群は出土遺物の希少さから、築造の実年代はほとんどわからないという結論に達してしまうので、ここではその共通項を抽出して何が言えるか考えてみる。

- 1、集落間の道路に面して並んでいる。
 - 2、道路が交差する地点を中心に造られる。
 - 3、道路の片側に集中する。
 - 4、石造物、埋納遺物を持たない。
 - 5、塚に伴う遺構はない。
- 一方異なる点は次のようになる。
- 6、塚の規模が大きく異なる。
 - 7、市谷遺跡塚群は後世になって墓域となっている。
 - 8、市谷遺跡塚群を通る道路は東金市東部と八街市南部、山武町西部の主要な村落を結ぶ幹線となっているが、千神塚の道路は谷津村と遠山村を結ぶ唯一の道路ではあるが、他集落の間の幹線とはなっていない。
 - 9、市谷塚は最も北側に塚群中最大規模の塚があったと言われるが、千神塚には飛び抜けて大きな塚は存在しない。

以上のような点からどのようなことがいえるであろうか。



第3図 市谷遺跡位置図 (1:5,000) 61.3



第4図 千神塚位置図 (1:5,000)

まず、両塚群はどういう意図で築造されたのであろうか。市谷塚群は上記の1、2、3及び9の根拠から十三塚に通ずるものがあると思われる。十三塚とは十三仏信仰における祭壇として造られたものであろうと考えられている。十三仏とは死者の追善供養のために初七日から始まる三十三回忌までの十三回供養仏事にそれぞれ割り当てられた仏・菩薩を言い、中央の塚を大きく築くのは十三仏板碑の主尊大日如来や阿弥陀如来を種子の頂上に据えることと関係があると言われている。十三塚は十三並ぶ塚のうち中央の七番目の塚が最も大きい例と端の塚が最も大きい場合とがある。市谷塚は後者の例に当たろう。現在市谷遺跡塚群周辺には多数の小さな塚が造られているが、それらは十三塚築造後に造られた近世墓にともなう土饅頭や境界としての塚などを想定できよう。そして、市谷塚が十三塚であれば、その築造時期は室町期と考えられるのではなかろうか。

一方、千神塚は、市谷塚群と比べて非常に規模が小さいものである。塚群築造には村落単位での造営が想定されるが、この大きさの違いを単に関わった村人の人数の多寡では判断すべきではなく、その目的の相違が大きさの違いとなって現れたのであろう。また、市谷遺跡塚群は塚群造成後後世一部が墓域となったが、千神塚築造の主体となった谷津集落の墓域は、本号で井上哲朗氏が紹介している中谷遺跡に形成されている。中谷遺跡の墓域の造営開始が、14世紀になることを考えると、千神塚築造時にはすでに墓域が成立していた可能性が高く、このことが、両塚群に見られる近世墓域の造営の有無の違いとなって現れたことも考えられよう。谷津村では慶安2年(1649)に遠山村(現横芝町)と境界争いが起こったが、村境に塚を築き決着した。しかし、その後当村が塚の手入れをしたことから再燃し、山室・引越・古和・八田4か村の名主が村境を確認して決着したといわれている。現況では千神塚群は両村の境界からはずれており、千神塚が記録に残る境界の塚とは確認できないが、塚築造の本来の目的とは離れて、道標や境界として現在に残っているものであろう。

引用・参考文献

- 『千葉県埋蔵文化財分布地図(2)―千葉市・香取・海上・匝瑳・山武地区―』財団法人千葉県文化財センター 1986
- 竹内理三編『角川日本地名大辞典 12 千葉県』1984
- 丸子 恒「千葉県東金市家之子古墳群緊急発掘調査概報」『立正大学文学部論叢』30 立正大学文学部 1968
- 村田一男『村上供養塚発掘調査報告書』上高野原古墳発掘調査団・八千代市教育委員会 1974
- 『八千代市村上遺跡群』財団法人千葉県都市公社 1974
- 今泉 潔『船橋市八木ヶ谷遺跡(遠山塚群)』財団法人千葉県文化財センター 1984
- 鈴木公雄「出土六道銭の分析」『増上寺子院群』東京都港区教育委員会 1988
- 鈴木公雄「出土銭貨研究の諸問題」『出土銭貨第3号』出土銭貨研究会 1995
- 小島櫻禮「十三塚の歴史的意義」『十三塚一実測調査・考察編』平凡社 1985
- 佐野賢治「十三仏信仰と十三塚」『十三塚一実測調査・考察編』平凡社 1985